

神道の基礎知識【御朱印編】

神道は、古くから日常生活の中で受け継がれ人々が自然のうちに身に着けてきた信仰です。本誌はご朱印についての知識をまとめたもので神社本庁が発行した資料をもとに編集してあります。ご朱印収集の参考になれば幸いです。

◇ 古来印章には宗教的性格があった

第四十一代・持統天皇の御代には印は祭祀に関はってみました。

- 持統天皇六年（六九二）九月丙午（十四日）

神祇官^{かみづかき}※、神宝^{かむたからのふみ}書^{まき}四卷、鑰^{かぎ}九個、木印^{きのおして}一箇を奏上^{まをしたてまつ}る。

（新編日本古典文学全集 4『日本書紀③』より）

- その国の印と倉の鑰がご神体と伝へられる「印鑰神社」や、印を祀る神社が各地にあります。

長崎県の印鑰神社、徳島県の大御和神社^{おおみわ}、香川県の城山神社^{きやま}、宮崎県の印鑰神社、栃木県の日枝神社^{ひえ}などがその例です。このやうに印は神聖視されてきたのです。

- 印は、紀元前五千年代後半にメソポタミアで発明され、所有物の表示や呪術的な護符の役割を果たしてきたといはれてみます。

（『国史大辞典』「印章」参照）

◇ 印の制度は権威の象徴として飛鳥・奈良時代にはじまった

印制については、律令の「公式令^{くしきりやう}」に規定されてみました。

- 大寶元年（七〇一）六月己酉（八日）

使^{つかひ}を七道に遣^{しちだう}して新令^{しんりやう}※によりて政^{まつりごと}を為し（中略）併せて新印^{あはにひしきおして}の様^{ためし}を頒付す。

（『續日本紀史料 第一巻』より）

- 捺印の目的は、朱印を押すことによって権威を示し、次に文書を保証し、併せて不正を防止することでした。

（萩野三七彦著『印章』参照）

- 中国秦代では、皇帝璽^{くわうていじ}を頂点とした印の制度が確立しました。

江戸時代に福岡県で出土した金印は、後漢の光武帝が倭の奴国の王の朝貢の際に、主従関係の証として授けたものといはれてみます。

（『国史大辞典』「印章」参照）

※ 神祇官とは…祭祀を執行し、神祇行政全般を管掌した中央官庁。（『神道史大辞典』参照）

※ 新令…大寶令

印は朱が正式・厚礼こうれいとされた

印制では、公式文書には朱印が押されました。

次第に黒印こくいんも使はれましたが、朱印に比べ略式なものとされました。

- 公式令（くしきりょう）には、色々と印の規定を詳細に記すが、印肉の記述はみえない。それは令制印りょうせいいんにおいては朱印のみが原則の印であって、たとえば黒印のごときは原則以外の印としたので、ことさら印は朱印に限るとの記述をしなかったのである。後世に、朱印は厚礼印こうれいいんなりと考えたことも令制印の原則に源流が思想である。奈良・平安時代の黒印は、「法隆寺一切経」印のように、文書以外の写経印・蔵書印、または印仏のような特殊なもののみに限られた。押印おしいんに使用する印肉は、朱と墨に限られてみたが、南北朝時代の久我家の家印の紫印を初見として安土桃山時代以降の青・紫・黄など多様の印肉の使用をみるようになった。これは、趣向上による。

（『国史大辞典』「朱印」より）

- 朱印は黒印よりも優位に、そして黒印は略式のものとして使用された。

（『国史大辞典』「黒印」より）

社寺では朱印に神秘的な力が宿るとも考へられてきた

古くから神社や仏閣では、厄除けの護符として朱印を捺した牛玉宝印ごわうほういんなどを頒布しておました。

- （牛玉宝印は）諸社・諸寺から発行、授与された護符の一種。木版刷または墨書で「二月堂牛玉宝印」「那智滝宝印」などと書かれた上に、いくつかの朱印が捺されているもので、社寺の修生会しゅうしょうえ・修二会しゆにえなどの初春の儀式の中で作られ、信者に配布される。
- （牛玉宝印は）その本質は捺されている朱印のほうにある。朱印こそが呪力の源泉である「宝印」なのであって（中略）つまり、社寺の有する朱印が、本来は牛玉宝印だったのである。

（神道文化叢書 35 『日本の護符文化』より）

納経受取なふきやうけとりの書付かきつけが現在の「御朱印」のかたちに繋がったといはれる

神仏習合の時代、書写した法華経などを神社にも納めておました。

- （納経とは）書写した経巻きょうかんを神社に奉納して信仰の深さをしめし、神仏の加護や故人の冥福を祈ること。巡礼者がおこなう場合は、たとえば日本回国六十六部にほんこくろくじゅうろくぶ聖ならば、《法華経》六十六部（一部は八巻）を写経し、これを諸国一宮に奉納して歩く。（中略）このとき寺から納経受取という書付と判をもらった。これが帳面になって、寺の本尊と

参詣の年月日を記入して判をもらうようになったのが納経帳の起源である。

(『大百科事典』「納経」より)

- 納経受取の書付を受けてみたものが、近世中期には、納経をせずとも、参拝の証をうけるやうに変化していったと考へられております。
- 神社に納経された代表的な事例に、嚴島神社の「平家納経」があります。

◇ 江戸時代 社寺の巡礼者に「参拝の証」が広く出されるやうになっていった

江戸時代には、納経や奉納に限らず参拝のみであっても神職が墨書押印する例がみられるやうになったといはれております。

- 現存する江戸時代の資料には、祠職や社務所の印が押してあるものも多く、神社に参詣した証をその管理者から書いて貰って見た様子が窺へます。

平野神社 文化元年（一八〇四）

龍田大社 文化元年（一八〇四）

資料提供／中澤伸弘氏

◇ 現在のやうな御朱印の様式は明治以降に普及していった

神社の朱印が中央に押されることが一般化しはじめたのは明治時代からといはれております。

- 石清水八幡宮の参拝印所蔵されるものの現存例

文化元年（一八〇四）

明治七年（一八〇四）

資料提供／中澤伸弘氏

◇ 鉄道の発達により参拝旅行が流行し集印が人々の楽しみとなった

大正から昭和にかけて、巡拝の歴史を背景に、旅行者も参拝の感動や旅先の思ひ出として集印を楽しむやうになりました。

- 大正十三年、皇太子殿下（後の昭和天皇）のご結婚を奉祝して朝日新聞社は、社員による紅白二班を編成し、不眠不休で行ふ全国神社の競争参拝を実施しました。記者たちは、神社での参拝時間を尊いものと感じ、日々押されてゆく神社の印や駅の印を旅の励みにして見たやうです。

(『ご成婚奉祝 神社山陵参拜記』参照)

- 神宮における御朱印は正式名称を「参拝証印」と言ひ、大正十四年に現在と同じく内宮・外宮の両神楽殿及び域外別宮である月讀宮、瀧原宮、伊雑宮、倭姫宮、月夜見宮の各宿

衛屋において印の押捺が始まりました。当初の印は円形で「内宮（外宮）参拝」の四字が刻まれておりましたが、「単なる参拝記念ではなく、一段と神聖な感じの御朱印を受けたい」との参拝者の要望に応へ、昭和十一年八月一日より「内宮（外宮）之印」と刻まれた角印に替はり今に至っております。

（『神社新報』平成十九年二月二十六日号より）

◆ 現在の「御朱印」といふ呼称は昭和初期からである

現在のやうに、社寺で受ける印が御朱印と呼ばれるやうになるのは比較的近年に一般化したことのやうです。

- 神社参詣の際に受ける印について、大正初期から昭和初期に著された書物の中では、次のやうな語で表現されております。

大正十三年『ご成婚奉祝 神社山陵参拜記』 印頼、社印、印、印證、御印、判、御判

大正十五年『官幣大社参詣記 御印

昭和七年『趣味の集印帖』 集印

昭和十年『兒童年鑑』別冊『集印帖』 御朱印

昭和十一年『長崎神社巡り』 集印

昭和十一年『こどもの参宮案内』 集印

昭和十三年『實業之日本』 集印

昭和十四年『神陵皇陵巡拜記』 御朱印

昭和十六年『壹岐國神社誌』 古印

昭和十九年『全國大社詣』 朱印、神印、印

◆ 「御朱印」は各社寺の解釈に基づくものである

御朱印には、参拝の証、神符守札、代参、集印、授与の有無についても各社寺により様々な信仰的解釈があります。

- 御朱印をしないといふ信仰のかたちもあります。

近年、京都・東本願寺では『朱印をしない理由』といふ教化リーフレットを配布し、教へとの出遭ひこそが大事であると説いております。

（真宗本廟教化リーフレット『朱印をしない理由』参照）

- キリスト教の著名な巡礼地、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」への巡礼路にある主な教会や巡礼宿には、巡礼手帳（クレデンシャル）に巡礼を記録するスタンプがあります。さらに、キリスト教徒ではなくても動機に「宗教」があれば、到着地の大聖堂で印が捺された巡礼証明書（コンポステーラ）が発行されます。

（『聖地サンティアゴ巡礼増補改訂版』参照）

◀→ あくまでも御朱印は信仰とともにある

様々な授与品と同様、「御朱印」は、信仰に基づいてみるからこそ尊いのです。

- （庄屋であった弥右衛門が諸国巡拝した際の）江戸中期の納経帳二冊（写し）を頂戴した。史料的价值がきはめて高いと思はれるのでその一端を紹介する。（中略）仏壇の上に神棚があるのだが、納経帳は仏壇の中に、手の届くところに置かれてみた。

（『神社新報』平成十六年二月二日号より）

- （御朱印を受ける際は）最も尊重すべきもの及び永久保存に耐ゆるものにて、即ち掛け軸又は記念帖の如きものゝみ限り許され、不敬に渉る恐あるものは拒絶さるゝのであります。

（『神陵皇陵巡拜謹記』より）

参考資料：神社本庁著

神札や御守が「神様の力が宿った神聖なもの」とされるのに対し、ご朱印は「参拝した証として戴く印状」と解されることもあります。

古来、巡礼者たちに重視されていたことは、納経よりも巡拝であったとも言われています。昔も今も、参詣に伴う移動時間や距離は、否応にもその人を雑多な日常から切り離してくれる要素の一つと言えます。参拝が叶った神社で受けたご朱印が、掛替えのない存在になる事は必然の事でしょう。

ご朱印をきっかけに行う現代的な巡拝は、個々の神社の縁起や地域の歴史などに触れながら、そのご神縁に思いを寄せる事で一層魅力的なものになるのではないのでしょうか。



神祀り本舗楽天支店 its-japan.jp/kr1



神祀り本舗ヤフー支店 its-japan.jp/ky1